

わたしの修習時代

紀尾井町：1948－70

湯島：1971－93

和光：1994－

58期

修習時代を共有した 同期の存在は最大の財産

会員 吉田 正彦 (58期)



2004年4月、第58期修習生として司法研修所に入所し、私の修習時代は始まった。私は、入所前、九州で生活していたため、いずみ寮に入寮した。

前期修習時代を振り返り真っ先に思い出されることの多くはいずみ寮でのことだ。私は同じ九州出身で以前からある程度顔見知りであったとある同期ととにかく連^つんで行動していた。互いの部屋を頻繁に行き来し、共通の友人の部屋にその友人の実家から送られてきた食べ物を食べに行ったりしていた。運動不足解消のために夜中にグラウンドで鬼ごっこ（2人鬼ごっこなので相当に過酷）をしたこともあった。もちろん、互いの起案を持ち寄って検討したり、勉強会もしていたが、楽しかったことばかりを思い出す。

5月に入所ころには、クラスの友人とも打ち解けた。研修所内での出来事を振り返っても、まず思い出すのは、クラスメートとこんなことやった、とか、皆の自己紹介が異常に長かった、などという一見どうでもいい出来事ばかりだ。

次いで、当然、修習内容についての記憶もよみがえるのだが、とにかく「楽しかった」というのが私の前期修習である。

私の実務修習地は函館で、函館配属の修習生は6人だった。最初のクールは検察修習だったが、私は、いきなり高熱を出してしまった。開始早々から修習を休みたくなかった私は、フラフラしながら登庁したが、私の状況を心配した検察庁職員の方々が私に庁内にあった布団を貸してくださり、なんと家まで運んでくださった。私は、心から感謝するとともに、体調管理に気をつけて、充実した実務修習にしようと心に誓った。

その「充実した実務修習」についての記憶を辿ってみるのだが、やはりここでも、同期にまつわるエピソードが真っ先に浮かんでくる。

検察修習の初期たしか最初の庁外での修習であった警察署見学でのことである。そこでは、指紋採取の体験をさせてもらった。プレートに指紋を付着させ、粉を振りかけて、綿のついた棒（筆のようなものだったかも知れない）で叩く、という手順だった。ところが、緊張のせいか1人の同期が、手順を誤り、なぜか自分の指先にいきなり銀色の粉を付けていた。当然、彼は次の手順を見失い、周りに悟られないよう目線だけをキョロキョロさせた後、隣に座っていた私の手元を凝視した。その視線に気づいた私は、彼と目が合い、彼の指先を見て状況を理解したときには、堪えきれずに大笑いしてしまったことを覚えている。

私は、この一件で、心が和んで、6人の同期と急速に打ち解けることができた。その後は、量的にも質的にもここでは書き切れないたくさんの思い出を共有した。

修習内容自体にほとんど触れられないまま、同期との思い出ばかりで、この原稿の終わりを迎えてしまうことになりそうであるが、これは、私の修習時代で得た最大の財産が修習時代を共有した同期の存在であると感じているからだろう。

実際、弁護士生活の中で、もっとも助けになっていると感じるのは、修習時代を共有した同期がいつもどこかで同じような悩みを抱えながらがんばっているという事実である。

最後に、修習時代に培った知見が、私の現在にとって、欠くことのできない基礎を与えてくれたことを、念のため付言して、本稿の締めとしたい。